

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

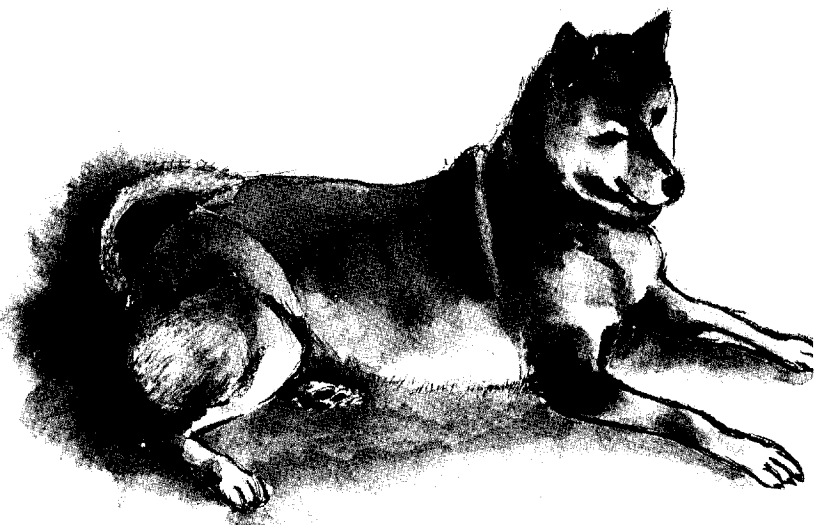
B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

連句 第14号 季刊



水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経歴を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典
日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一六〇〇円
B5 一六〇〇円

国語慣用句大辞典 A5 六八〇〇円
白石大二編

国語慣用句辞典 B6 三三〇〇円
白石大二編

国語史辞典 B6 三三〇〇円
林巨樹他編

日本語語源辞典 B6 一八〇〇円
堀井金以他編

京都語辞典 B6 一八〇〇円
井之口・堀井編

擬音語擬態語辞典 B6 一八〇〇円
天沼 幸編

隠語辞典 B6 一八〇〇円
櫻垣 実美編

近世上方語辞典 A5 二六〇〇円
前田 勇編

花柳風俗語辞典 B6 二二〇〇円
藤井宗哲編

新語新語俗語辞典 B6 二二〇〇円
権島忠夫他編

難訓辞典 B6 二二〇〇円
中山泰昌編

名乗辞典 B6 二二〇〇円
荒木良道編

名数数詞辞典 B6 二二〇〇円
森 隆彦編

あいさつ語辞典 B6 二二〇〇円
奥山益期編

新版 ことば遊び辞典 B6 二二〇〇円
鈴木業三編

類語辞典 B6 二二〇〇円
鈴木・広田編

類義語辞典 B6 二二〇〇円
徳川・宮島編

表現類語辞典 B6 二二〇〇円
藤原冬一他編

新版 文章表現辞典 B6 二二〇〇円
神島・村松編

東京堂出版

101 東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-233-3741-2

連句辞典の完成(南柏雑記12).....	1
故人名は他か場か.....東 明 雅.....	2
ACC連句教室の再編成.....	5
俳諧の笑い話.....武 藤 禎 夫.....	6
『連句辞典』編纂者の辞.....	8
①用語篇雑感.....大 畑 健 治.....	8
②起情二つ.....宮 脇 眞 彦.....	14
③連句研究の現状.....長 島 弘 明.....	18
④用語遍歴.....杉 内 徒 司.....	21
芭蕉口傳(蓮の糸 五尺の菖蒲 乞食袋).....13	(日当の柱).....17
絶頂の城 付勝練習歌仙.....	24
第18回猫蓑会 二十韻 六作品.....	26
瀧見翁.....穴沢篤子 睡 蓮.....島田和世 歩道橋.....杉戸金一	
四十雀.....高瀬美保 梅雨あがれ...中川哲 返り梅雨...原田千町	
鷗外居 二十韻.....	鈴木 春山洞.....28
連句会案内.....	29
雁帛往来.....	29

表紙 (柴犬) 宮崎 龍火子

連句辞典の完成

南 柏 雑 記 12

雅

連句辞典はもう半歳は早く世に出るべきものだった。計画は綿密に立てたつもりなのだが世の中のことは何でも、思う通りには行かぬものである。六十年度中に出る筈のものが、つい延び延びとなる。原稿が揃わぬ。校正もひまがかる。思いもよらぬ原稿が飛び入りする。四月から五月になると、流石に私どもの眼の色が変わった。それは他の人に対する面目というよりは、自分に対する意地だったようだ。

「五月二十二日二時、東京堂で杉内氏に逢い係りの菅原君に

- ①「連句入門の手引き」念稿。
 - ②「人名篇」再校。
 - ③「用語篇」「に」?「わ」再校。
 - ④「参考文献」再校及び大畑氏「補遺」
- 以上をわたし、五時半すぎまで作業、お茶の水の「ニュートキーヨー」でビール、冷酒を飲み帰宅、八時半就寝。」と私の日記にある。いくら酔ったからと言って、八時半

就寝は異常である。このころ、余程疲れていたのだろう。毎日の晩酌も酒量が平常のほぼ二倍になった。疲労は肉体ばかりではなかったのである。

私は辞書を作ったのは始めてである。だから、その作り方を知らなかったのが、一番悩んだものである。今から考えてみれば、反省すべき点が多い。考えてみると、最初から、もすこし、読者として対象になる人を限定すべきであった。まるで連句の何たるかを知らぬ人から、大学の専門家までを包含する辞書とは、どんなものであるべきか。それで、「近代連句入門の手引き」などが大部分を占めることになったが、もし、「俳句辞典」なら蛇足であるものが、連句には必要であった。これが連句の運命であり、現在おかれている立場である。このあたりにも私たちの苦心はあった。その外、初めての試みだけに、分らぬことが多すぎた。

しかし、これも貴重な体験をさせていただいたと思えば氣は楽だ。

それだけに六月二十六日午後三時、東京堂で杉内氏と逢って、出来たての湯気のたっているような「連句辞典」を手にした時の感激は一入であった。小じんまりとまとまって、装釘も悪くない。内容は御批判をいただく外はないが、一つだけ、自慢させていたたくと、巻末に初心者用の「歌仙季題配置表」とならべて、○まろ庵雪也編の「蕉風俳諧変化表」を付けたことである。これを利用して、現代連句も早く中級・上級の連句に進みたいものである。

故人名は他か場か

東 明 雅

- (1) 逆髪の祭りも見ずに終はりたり
- (2) 彼との愛用煙草キャスター
- (3) 岳樺福永武彦軽井沢
- (4) 野良猫いつか戸袋に棲み
- (5) 河豚汁の昨日の過ぎて医者通ひ

右の一連は六十一年五月十八日、柏の連句会で捌かれたものである。ここに福永武彦という人名が現われる。小説家福永武彦を知らぬ人はまずないとしても、彼はまだ生存していると思っっている人はすくなくあるまい。だが、正確には昭和五十四年に既に故人となっておられるのである。このような場合、この人名をどう取り扱うか、この問題については私も疑問があるまま、はっきりした意見を述べていなかった。そこで、その場に居合せた方々から、次のような疑問が出された。その疑問を整理すると次のようになる。

(1) その人物が実存（生存中）の人物なら当然他とすべきか。

(2) その人物が故人の場合はこれを場とすべきか。
(3) 故人でも比較的最近に亡られた時はこれを他と取ってもよいか。あるいはあくまで場とするべきか。

(4) 歴史的人物を詠んだ時、これはあくまで場であって他としてはならないか。

(5) 右のことはその場の雰囲気によって臨機応変に処すべきものなのか。

右のような場合、やはり第一に参考になるのは芭蕉の作品であるが、

(1) の場合、その人が実存（生存中）の人と見られるには、次のような例がある。

- a 金鏑と人によぼる身のやすさ (『猿蓑』) 自
- b 内蔵頭かと呼声は誰 (『猿蓑』) 自他半
- c 坊主になれどやはり仁平次 (『炭俵』) 他

(2) の場合
a しばし宗祇の名を付し水 (『冬の日』) 場
b 日東の李白が坊に月を見て (『冬の日』) 自他半

c 桃花を手折る貞徳の富 (『冬の日』) 他
d 襟に高尾の片袖を解く (『冬の日』) 自他半

(1) にも場となる可能性は理論的に存在するが実例は見出せなかった。

(1)と(2)に差がないのであるから、(3)と(4)も当然、その句の作り方次第で、自・他・自他半あるいは場と、いずれにでもなるのである。しかし、それは(5)にあるように、「その句、その場の雰囲気によって臨機応変に処すべきもの」と言うよりは、句作の狙い、ことに前句との関連によって、はっきり判別できるところであらう。

たとえば、この問題の句、「岳樺福永武彦軽井沢」の句にしても、前句が「彼との愛用煙草キャスター」と言う、何かバタクさい瀟洒な煙草を頌ちのむ生活であるから、その余情付として、福永武彦を出したものであったとすれば、この句は人情他と解し、岳樺のある軽井沢の別荘における福永武彦の生活を描いたものとなる。また、作者が前句の生活から直ちに軽井沢を連想し、さらにその軽井沢の縁で

岳樺や、故人となった福永武彦の名を添えただけのものならば、場の句というべきであらう。それは福永武彦の名は出ているけれども、(2)の a「しばし宗祇の名を付し水」ほどにも具体性が見られないから、場の句と見てよいであらう。それにしても、この一連を見ると、(1)自、(2)自他半、(3)が場、(4)が自であるから、(1)は場でも他でもよく、私としては、つい最近になくなった福永武彦の場合などむしろ他の句と取りたいところである。

さらに、これには次のような問題が残っている。(6)故人である有名人が何かをしている様をそのまま想像して詠むことは、『あり得ぬ事は付かぬ』という部類に入るのか、どうか。あるいは過去に於てあり得たであろう事であったら、これを是とすべきか。

『あり得る事は付く、あり得ぬ事は付かぬ』と言うのは、私の師匠根津芦丈先生の教えて、私も度々、この言葉を口にした。その真意は、昔の季寄せや歳時記には出ていても、現代の社会には存在しない、また通用しないものが幾らで

東 明 雅 著

連句入門

中公新書 508号
価 五〇〇円

芭蕉の恋句

岩波新書 91号
価 三三〇円

猫 蓑

永田書房
価 二三〇〇円

好色五人女 好色一代女

小学館
価 一九〇〇円

もある。たとえば「砧」などは、秋の季語であるが、砧と言えば、女性が洗濯した衣をたたきながら、遠くにある夫や恋人のことを思う情愛の深い語として、中国の詩にも多く詠まれ、日本の和歌や俳諧にも取り入れられた。しかし、それは着物の繊維が堅かった昔の話で、洗った繊維を叩いてやわらかに着心地よくするために砧の必要があったのだが、現在の柔かな繊維で作られた着物では、そんな必要がないために、全く世間から姿を消している。その砧の音を現在いかにも実際に聞いたように作句する。そのようなことを芦丈先生は嫌って、そんなことをするのを禁じられたので、これは尤万なことである。しかし、人によると、これを拡大解釈して、空想上のものはすべて拒否するという頑な態度を取る人もないではないが、それは行きすぎたいうものであろう。

現に、(2)のcであげた芭蕉の「桃花を手折る貞徳の富」も彼の想像であろうし、dの「襟に高尾の片袖を解く」も豪奢な風俗をあらわすための想像であり、ともに現実のものであったとは考えられない。

芦丈先生の連句集『この一路』（昭和三十六年刊）を見ても、

ノ貫が翌行春を余所願に

(他)

子供になつて遊ぶ良寛

(他)

弟子もとらず明珍秋の灸に坐し

(他)

白隠がいまはの笑ひからからと

(他)

ひとり舌まく幻庵が棋譜

(自)

など、実在した故人の行状がさまざまに空想されて登場する。これらは『あり得ると思ひ、付け得る』と思われたからである。

しかし、芭蕉も芦丈先生も故人の名を出された作品はあるけれども、その数は決して多くない。また、芭蕉にあっては『冬の日』から『猿蓑』、そして『炭俵』と進むにつれて少なくなってゆくようである。これは一つにはあまり有名な故人の名を出すことが軽みに進む作風にそぐわぬようになつて来た為とも思われるが、さらに彼の創始した面影の付けの為とも思われる。

草庵に暫く居ては打やぶり

いのち嬉しき撰集の沙汰

(『猿蓑』)

の例を持ち出すまでもなく、はっきり西行なり西行と名を出すよりも、それらしい人物としておぼろげに出す方が、読者にも興味があり、第一、次の作者が付けやすいのである。これが蕪村などになると、はや忘れられたのか、人名がより多く出てくるのも俳諧の衰退の一步である。

結論として、故人の名を出し、現実の人のように活躍させることは自由である。決して蕉風ではそこまで人の空想を制限していない。しかし、せつかく面影付というものがあるから、これを活用するのも一つの有効な手法である。

A・C・C連句教室の再編成

A・C・Cが発足したのは昭和五十六年四月のことであつた。その時の様子をありありと書いているのが、季刊連句創刊号の歌川（鳥沢）和代さんの文章である。そこにも書いてあるように、先生も受講生も全く初めてであつたから「真に初々しい先生と生徒たち」であつた。しかし、これが二年たち、三年たち、今では六年目の後半になつている。そして最初からの方が七・八名残つておられ、それに、二期、三期から今度は十期生までが一教室で勉強して来た。先輩・後輩助け合つて一座を楽しむのは大変愉快ではあるが、何としても五年の差は大きい。一期の方などには私よりもむしろ知識・感覚ともによくれた方があり、私は大いに力にし、うれしいことではあるが、山村僻地の分教場みたいに、高い水準のお話をすれば、新米の方には分からず、新米の方を立てれば、古参の方には当然繰り返しとなり、いかにかこの矛盾を解決するか、私も真剣に悩んで来たのであるが、もうそろそろ限界であろう。まさか中学の三年生と小学の一年生を一緒の分教場もあるまいではないか。

それで、この十月からはクラスを二つに分け、いわば研究科と入門科に分けて教えることにした。教える時間が増えるのは苦しいけれども、どちらに気兼ねしないで、のびのびと教えられたら、気持ちさっぱりするだろうと思う。

まず、入門科は在来のやり方でやるつもりである。入つて来た人をいきなり一座に引き入れ、まるで水泳のできない人をプールに投げこむように、アップアップの経験をさせた後に、おもむろに「連句入門」を教科書に、付け、転じから教えこめばわかりも早いだろう。

研究科は一応、実作は卒業されたのであるが、また興味のある方には俳諧の理論、古典・現代作品鑑賞を主にして、時々実作を交えて行けばまた楽しいのではあるまいか。

一応、七期以後の人を入門科、六期以前の方を研究科とするが、それは一応の規準であつて、興味のある方はどちらに出られてもかまわない。

とに角、どのような結果になるか、分からないが十月以後はこのようにして頑張ってみるつもりである。

(東 明雅)

俳諧の笑い話

武藤 禎夫

(共立女子大教授)

新刊の岩波文庫『醒睡笑』は、江戸初期の笑話の集大成で、そこには中世末に流行した連歌や俳諧に関する話柄もかなり見られる。宗祇とか紹巴など有名人の逸話も多少まじるが、本の性格上、やはり誇張された笑いや、おかしさを強調した失敗啗が中心になっている。願ってもない良師に恵まれながら、いたって不熱心で、いつまでも未熟な句作と無知を繰返している私には、同志的な親しみと気安さを覚えるので、その二、三を紹介してみる。

○老母、老父と成人の男子、三人一所にあり。さらでだにいぶせきはいりの小屋、春雨すさぶ永日なれば、暮しかねつるつれづれに、老父むす子に向ひ、「俳諧をして遊ばんものを」といふに、男子「もつとも」と同じ、発句をする。

ててじゃ者ははじゃが者にうち迷ひ

老父「さらば付けん」と、

それにつけてぞおのれできける

狭い陋屋に住む貧乏世帯ながら、親子して俳諧を楽しむ心のゆとりは羨ましく、その団欒ぶりは、馬場彬風氏の「家庭連句」に通ずるものがある。艶色味の濃い付合も率直、庶民的で笑いを誘うものがある。

○田舎のかせ侍、長陣の慰みに、「俳諧をして遊ばん」といひつて、

人はらんぼうをしてさへ送る世に

とあれば、「さらば付け申さん」とて、

われらは野兵糧だにもなし

田舎の無学な下級武士たちも、滞陣の退屈しのぎに我流で俳諧に遊んでいる。ただ、生かじりの悲しさ、乱妨(掠奪)とか野兵糧などと物騒な軍中用語を持ち出したり、「乱」の字を切れ字「らん」のつもりで使ったり、「人はらん・ぼうをしてさへ」「われらはのひやう・糧だにもなし」と、句割れ・句跨りも何のその、弁慶がな、がきな、ぎなたた式に詠んだ滑稽である。しばしば第三の胴切れの注意を受ける私には、手放しでこの田舎侍を笑えない。

元朝早々、火をおこす小僧が吹く火吹竹で灰まぶれになった和尚が、「祝うて俳諧の発句をせん」と、

小僧めがふくとくわれにふきかけて

福徳を吹きかけた縁起直しに詠むと、すかさず、

坊主を見れば灰にこそなれ

灰い火葬になったと皮肉な付句をする、落語「かつぎや」につながる和尚と小僧話もある。このように、社会の

低い階層でも、俳諧流行に乗って気軽に楽しんでいた。

しかし、正式に宗匠につき、式目を知り、付合を習うに越したことはない。俳諧の極意、一句の仕立ての工夫について、「心を深く、物あはれに、花奢風流に付くやうに」と教えられた初心者が、教え通り忠実に、

首ぎはや二季の彼岸に茶香杵

と詠む。宗匠から句の意味を聞かれ、「首際まで水とは、深う詠んだもの、物あはれに二季の彼岸を出し、花奢風流には茶道香道、付くためには何よりも餅をつく杵だから」とと答える。句が付くと餅を搗くを掛けた洒落だが、かの有名な宗長でも、丹波の杵の宮に詣った時、「つくやうに守らせ給へ杵の宮米こそ持たね連歌なりとも」と詠んでいるくらいだから、これからは杵のお守り持参で句座に出ようかと思っている。

付く付かぬといえ、他人の句を見るたびに、「あなおもしろき取合せや。さすがふるぐすねや」と感心する体の宗匠がいた。弟子から「ふるぐすね」の意味を問われ、「古ぐすねはつかぬ物なるまま、付かぬ句あるを、われは申して候よ」と説明した話もある。松脂を油で煮て練りまぜた薬練は粘着力があるが、古くなっては効きめも薄れて付かなくなる。端的に「付かず」と斥けず、婉曲に「ふるぐすね」の隠し言葉で対応していた宗匠の心遣いはありがたいが、訳が分かれば、ごめん蒙りたい言葉である。

このような手合いは、指合・去嫌についてもまた、平気で失敗を重ねている。

○一句出したるに、執筆「舟が近い、近い」といひけるを、とくと思案して、

舟でなし中くりあけた木にのりて

七句去りといわれる舟を、「中くりあけた木」とは言い得て妙である。また、移徙の連歌の席で、

春の日は軒端につきてまはるらん

という句を出し、宗匠は、日は火に通じて不吉だから「消せ」と命ずる。執筆が「数度の直しで、これ以上は消されぬ」というと、この作者「とにかく消しなさい。またすぐつけるから」と、付け火にも通ずる失言を犯している。

熱中するあまり、狂に凝り固まる御仁も登場する。

連歌に身をやつし、心をそめ、臥するにも起くるにも、この事のみなりつる人の栖家なる軒の下に、夜小便する音しけり。かの亭主、とがめていへるやう、「夜分に居所へきたって水辺を下すは、人倫か生類か。植物をもつて打擲せよ」

「夜、うちの軒下で立小便の音がするが、人間か、犬かな。とにかく杖で叩きのめせ」では散文的すぎるが、この用語づくしは噴飯物。こうした主人に仕える下男は、日夜小耳に挟んでいるので、朋輩への愚痴話にも、「朝とくより供し、夜更くるまで詰むる辛勞、いやにはあれど、さりながらいま一季あざろうか知らぬ」と、契約期間を一年継続する重年しんねん居なりに、自分の句にまた自句を付ける求食の用語を使っている。『連句辞典』の「あざり場」の項を読んで、ふと思ひ出した笑話である。

① 用語篇 雑感

大畑 健治
(職業訓練大学校)

連句専門の辞典が現れるのを渴望していた人たちは多勢いた。その理由はいうまでもなく、連句が復活してからそれほど時間が経過しておらず、同義・類義の用語が混乱して、それを正して整理する俳諧師の多くが他界してしまつたからである。現代人には格に入りて格を出る自由な連句精神の神髓が理解しにくくなっているが、それ以前に、発想の基盤をなす用語をしっかりと理解しなければならぬのである。

事実、現代人の眼には儀式にしか過ぎないと映る正式俳諧興行にも、文字化されたいわゆる文芸としての連句を、行動的な実体験を通して裏から支えるものが秘められている。それは、連句がパフォーマンスの文芸であることを象

徴する儀式である。上手な文字文芸さえ作られればよいというような現代文芸の風潮とは根本的に異なる。社会の営みと個人の自由を両立させようとするところに連句は成立する。現実を見据えて人間性を尊重する文芸は、現実性を捨象した文献資料から説明するには限界がある。代々の俳諧師たちはこれを口伝によって伝えてきた。この口伝として伝えられてきた理由を十分理解していないと、現代文芸の如く千篇一律に扱いかねない。現代人が意味の筋だけ一句を解釈し得ても、僅かな表現のあやを読み取る能力がなければ、前句に対する付けの手法を誤解することも生じるのである。意味が同じでも、句の仕立て方により人情の機微は変化する。口伝とは、そうした個々の具体例に接す

るごとに宗匠から弟子に示される。口伝の真意は秘することにあるのではない。生きた呼吸を伝えるためである。これは弟子の資質にもよる。それを部外者が、現代的な平凡な知識と同様に心得て、守秘主義などと口伝批判するのは盲評といえよう。現に口伝で学んだ者が、入門書や研究書を見て飽き足らなく思うのは、現代の合理主義による形式的論理で活字文に組まれると、生命を宿しているべき連句の生彩が失われるからである。恋する思いを口にすると、その思いが味気なくなってしまうのと同じである。用語も合理的に説明しようとする、意味内容に微妙な齟齬が生まれる。

注釈書類で、付けの手法を句付と説明した次の付けに会釈と説明し、さらに次の付けに観相などと説明しているようなものは論外として、用語が使用者独自の判断で定義付けられ、乱用されていたのでは、連句の将来は覚束ない。こうした現状からしても、辞典は必要となつている。しかし、その辞典も、表現上現代の論理的な文章によらざるを得ない。事項の説明はよいにしても、付けの心法には枷が加えられることになる。現時点における辞典は、取り敢えず用語の混乱を整理すること、現実的なパフォーマンス性を崩さないことに配慮して、吟味選定された項目とスタンダードな内容を備えたものが要求されているのではないかと思われる。

このたび東京堂出版から刊行した『連句辞典』は、そう

した連句界全体の動向を加味して編集された。辞典のスタイルはいろいろなものが考えられるが、読者に実作者・研究者・鑑賞者を想定した。特に、実作と研究の立場は不可分な関係に置かれており、蕉風連句を対象とする研究用語と実作用語が同一に扱われているのが現状である。そして、それぞれが辞典を必要としている。そこで、これら三者の要求に応えられる辞典が考えられた。しかし、限られた紙数と期限の中で、近世から現代までの連句を網羅することは到底不可能である。連句に少しでも関わる語を選んで採用すると、相当数に上る。中には用語のみが伝存し、意味内容不明の語もかなり存在する。それらは殆ど芭蕉から現代に至る時代の流れの中で発案生成され世に流布することなく忘却されていった語であろう。もちろん、これらの語を細大洩らさず収めた辞典も考えられるが、今回の企画はコンパクトタイプの辞典である。また、そのような辞典が出ると、収拾のつかない状態を招きかねないのが実作界の現状である。現代の研究や創作に必要な用語を中心として節にかけるに及くはない。その照準は、いうまでもなく蕉風連句に向けられる。蕉風といっても、芭蕉在世中から没後三〇〇年を迎える現代に至るまで、さまざまな史相を呈してきた。用語解説を執筆した五名もまた、蕉風の流れを汲む根津芦丈翁の教えを、直接的間接的に学んできた者である。しかし、辞典となると、師の教えをそのまま解説文にすることは許されない。公的な性質を無視してはならないのである。伝統的文芸である連句は、今でも文芸

性において、芭蕉の理論と作品が完全に他を圧倒している。そして、現代に至るまでの代々の俳諧師たちが範を芭蕉に求めてきたことも事実である。さらに、西欧文化から一歩離れて独自の文芸性を保持してきた連句は、貴重な文化遺産であり、大切に扱われなければならない。そこで芦丈翁の教えを再度芭蕉の俳論と作品によって検証し、妥当な線に添って用語解説を施すことが最善であると考えた。芦丈翁は諸国行脚され、各地の俳諧師と広く風交を求められ、俳諧精神を培われた人である。この芦丈翁の教えに狂いのないことは、芭蕉を検証することによって思い知らされた。それでもなお、本辞典の用語解説では芭蕉の俳論と作品を重視した。それは芦丈翁の教えを軽視したわけではない。蕉門の論書に触れられていない部分では、芭蕉作品で検証の上、大いに解説文に生かされている。しかし、芭蕉重視の主な理由は次による。

用語の解説に対し、典拠を詮索する読者が必ず現れる。そして、その都度是非が論じられ、実作界は実作以前の問題で大揺れに揺れる。実作に通じた作者ならば、典拠などにこだわらず、実作に有益であるか否かを見抜き、是非は是非として済ませるところであるが、そこまで到っていないのが現状である。実際、正式俳諧興行は芭蕉の時代には存在しなかったなどという妄説が飛び交い、その渦中に置かれたこともある。このようなことは再三再四に及んだ。このため辞典編集に際し、一つ位は典拠を示しておきたいという願いがあつた。解説中に芭蕉およびその一門の

俳論や作品を踏まえ、参考班担当の人たちの手を煩わせたのも、このような理由によるとともに、辞典としての妥当性と公平性を示し、読者が直接原典に接して再検証しやすいうようにするための配慮である。

また、用語篇の見出し項目と解説は、すべてが芭蕉関係の文献資料によったわけではない。正式俳諧興行に関する一連の用語は、芦丈門に伝えられる作法によって補った。これは、芭蕉在世中の資料によって一部確認されるものの、芭蕉の執行した作法の詳細が文献に残されていない理由による。これらは恐らく二見鴻の文台のように、口伝として伝えられたものであろう。しかるに芦丈門では、「俳席の掟」など芭蕉のそれを伝えている。もちろん美濃派にもそれなりの方式が伝えられているが、全体的な統一性を考えて、とりあえず芦丈門に伝わる作法を民俗学的資料として採用することにした。「懐紙」の項で藤の花書きに触れているのも、かかる執筆基準による。また、芭蕉以降の資料においても、有益と思われるものや現代に市民権を得ているものは、見出し項目や解説に採用した。「べた付」「不即不離」などはその例である。「三つ物」の作法にしても、芦丈門に伝えられていて芭蕉の作品例に見当らぬ作法を蕉村の作品によって例証した。さらに、「俳席の掟」などは研究的立場からすれば「掟」である。この「掟」の不明確性を補うため、修飾語「俳席の」を補った。「植物」の読みなども右に準じて決定したものである。

項目の立て方について、杉内氏より「読める辞典」にな

るとよいのではないかと、との提案がなされた。確かに魅力がある。しかし、細部まで検討して困った。七名と八体と人情の自他などを含めて解説を施さなければならぬような場合も想定され、この方式では幾通りもの具体例を示す単行本になってしまう。また時には、用語だけ用いられて、用語の解説が脱落する危険性もある。同一用語が目まぐるしく瀬出する恐れもある。かくて谷地氏より、作品鑑賞篇を別に設け、用語の実際的な用例と併読して読者に理解を深めていただく、という方法が示された。これが大項目によらず、小項目を立てるに至った経緯である。それでも「七名八体」の項目に対して「有心付」「会釈」「其人」などの別立て細項目を見出しに設けながら、「四道」の添・随・放・逆などは一項目に纏めて解説した。「脇五体」も同様である。その理由は、蕉風連句を中心にして考えるとき、「四道」は蕉風以前の発想方法、「脇五体」はそれに準じた発想方法に依存しており、付句を案じるときの前句の取り扱い方からすると、「七名八体」で十分に対応できる。「四道」や「脇五体」にまで別立ての細項目を立てると、「七名八体」と混同し、再び術学的な用語の解釈がなされるに違いない。現に阿部正美氏も、用語の混乱に苦勞されたという。この辺り、臨機応変に処理したことを了解されたい。

次に、編集上最終校でいくつかの見落としがあった。本書が連句辞典の嚆矢であるという気負いもあって、最初に慎重であり過ぎた余り、作業の進行は序破急ならぬ序破急

急であった。前述の如く、本書には紙数と期限が限られていた。東先生が、「期限が遅れて不義理をしては申訳ない」とつねづね申されるお心遣いは、編集委員一同に切実に伝わってくる。量のある原稿は削除の手を加えなければ取まらない。しかも校正刷はこま切りに次から次へと送られてくる。その間にも少しでもよい辞典にしようとする手が加えられ、ときには項目ごとの削除・追加もあった。こうした中で、↓印で示した参照項目の存在しないものも現れた。一部に纏って校正不十分なところも生じた。一一五頁下段八〜九行目は、「作中人物としての寺の備人であつて、寺の備人に作者は視線を向けて」とあるべきところ。一一五頁上段八〜九行目は、「これもまた、右の勢いからすると走りで見られるかもしれない」とあるべきところ。一一七頁上段二行目の「花の句」は「花」とあるべきところ。いずれも注意深く読めば気付くところである。

期限の問題は単なる約束のみならず、辞典の刊行を心待ちにしている人々への面目でもある。私自身この点に関しては、一日も早く上梓すべきであるという考えに立っていたのである。

最後に、現代人には理解しにくい連句の発想法について触れておきたい。

連句には、現代の合理主義的な分類方法とは違った分類方法が用いられている。俳諧師たちの体系は生命を核とし、生活的な感覚で感じ取ったままに対象を分類整理する方法

に立脚している。その顕著な例として、「食物」の項を見ると、動物や植物でも調理に付されたものは食物として扱われる。これは、既に動物や植物としての本質的な生命を失っているからである。根付きの植物と根無し植物という考えも、そこから生じてくる。「葉」がこうした生命の衰えから派生し、「無常」が釈教とは別に扱われるのも、追悼と追善が別に扱われるのも、死に思いを至らしめた死と己れとの関わりがそこにあるからに他ならない。また、「食物」のように、人工の手が加わっているかどうかも一つの分類基準である。自然の山と人工の築山、木と木材を加工した器物などはそれである。付所としての八体などは、現代合理主義からすれば、時間・空間（天候）・人物（物故者）・時事・観念（架空人物）として分類したいところである。しかし、これでは「旅体」「居所」「植物」「動物」などの素材を示す言葉と同じようなものになってしまふ。八体という「其場」「其人」の「其」が、前句に対して思い遣る付所を示していることに注意しなければならぬ。「時節」は前句の其の時節であり、「天相」は前句の其の天相に着目して付句を案じよ、ということに他ならない。発案者の支考は用語の語呂のよさを重んじて、「其」という付所を示す語を以下の用語から省略したのである。これは逆に考えると、伝統的な用語を尊重した処置であり、史的研究の立場からすれば支考の誠実さを示すものである。この「其」の省略を、現代人の硬直した思考力では埋め合わせることができない。一を聞いて十を知るといふ底

用的推理力が退化してしまっているのである。ところで、この「其」を付して、現代人が理解しやすいように其人物・其空間と換言してみる。一見妥当と思われるが、人は人物を抱括し、場は空間を抱括される関係にある。其場を其場所としても、場が場所を抱括する関係にあるため、両者の関係に等価性を認めることは困難となる。人間（作者）との関わりを軽重への思いが「其人」と「面影」の違いを生み、雪や雨などに対する思いが、「其場」とは別の「天相」の分類をなさしめるのである。そこには揺れ動いて止まない人間の原初的感受性が作用していることを見逃してはいない。

八体はいずれも前句を思い遣るところに成立する用語である。人間の原初的感受性に触発される作者自身のさまざまな八生まの思いVがそこには籠められている。現代日本人はこの八生まの思いVさえも観念化しても遊び、それを八生まの思いVと信じ込んでしまっている。「事実在り得るものは付く、在り得ないものは付かない」とする考えも、現実世界における原初的感受性の喚起を大切にすることを、連句を単なる美的架空世界の産物と定義付けることとの不当性がここに指摘される。体験を事実による実体験、事実による仮体験、事実によらぬ架空体験と分類すれば、発句・脇は実体験、他の付句は実体験と仮体験によるものである。しかして、この仮体験による八思いVは、八生まの思いVを追体験するに等しい。精神的に考えた八思いVではなく、魂に感じた八思いVである。思い

遣りが取沙汰される昨今、これらの発想法を見直すことは、連句の将来を考えるときに無視できない筈である。

俳諧師たちの生活感覚による分類方法は、現代人が見捨ててきた感覚を認識の基底に置き、言葉以前の原初的な感受性を潜ませている。素材としての「簗物」も、簗え立つものと解釈すると理解不可能になる。空中に姿を現わす手に取ることでできないようなものへの八生まの思いVがこの用語を成立せしめたのであろう。こうした分類方法は付句の発想方法と相関関係にあり、これを崩すことは連句の本質破壊に繋がる。現代的な考え方からすれば、「四道」は実に整然としており、理解しやすい。連句がこの「四道」を捨てて「七名」を採用したのは、前句を付句と向かい合うものとせず、前句を認めた上でその筋を受けながら対応の仕方を考えるという、高度な付けの手法によるものだからである。

蓮の糸

総て俳諧は前句を離れずして然も離れ、はなれて離れぬ様にあるべし。如何に句柄はけ高く飾りたり共、前句へ心通はずば不和なる夫婦のごとく家を斉ふ可からず。又いかに付たりとも一句の様は賤しければ詮なし。よくその心通ひたるこそ、めでたく覚ゆれ。是をたとへて云はば蓮の茎を折りて見るべし。切ばきれやすくしてしかも其糸絶ることなし。其如く打越をのがれ、前句の心を捨つるは蓮の茎を折るに異ならず。さて縁の詞心よく通はば、寄せ合の糸のつづけるが如し。

（芭蕉翁口授）

現代人に理解しやすい等価性のある語によって付句を余情付と改め、七名に付けの手法、八体に付所の説明を付して理解しやすくするのは、見習うべき方法である。新たな付けの手法や付所などを考案しようとする場合にも、合理性以前に、まず俳諧師たちの感受性と生活感覚を大切にしなければなるまい。これは、精神以前の魂に眼を向けよ、ということに他ならない。本辞典の用語篇解説には、上手に句を作るなどという方法は書いていない。しかし、連句の本質的な機微に触れることができるような配慮はなされている。そこを読み取っていただき、実作される方々の心の成長に伴なって句作の上達されることを祈ってやまない。また研究される方々には、資料や現代的理論ではその肌に触れにくい面があることをお知りいただき、文芸としての連句の本質を探究していただければ幸いである。

五尺の菖蒲

句の仕立は五尺の菖蒲に水を懸たるが如く、又池水よりすかすかと生出るが如く、蒲丈ることなく、け高く、口にはさばらず、ゆるゆる仕立たらんぞ、めでたかるべし

（芭蕉翁口授）

乞食袋

乞食は袋一つより持たぬものなり。貰う物を何によらず是に収めて常に隠す。其入用の時撰みて用ゆ。俳諧の学問も是に同じく、あらゆる世事と漢のことくさをよく見聞置て、用ゆべきにはあねどみな袋にて蓄ふべし。（芭蕉翁口授）

